

3. 飼料用米専用品種「モミロマン」の収量性と早植えによる増収効果

[要約]

「モミロマン」は、施肥窒素量4～12kg/10aの範囲において、「アケボノ」に比べて粗玄米収量が約2割多い。また、「モミロマン」は「アケボノ」と異なり、早植えによる増収効果が大きい。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 作物・経営研究室

[連絡先] 電話086-955-0275

[分類] 情報

[背景・ねらい]

多収性品種は一般に多肥栽培が必要とされるが、コストや散布労力の点で施肥量を抑えたい場合も考えられる。そこで、少肥～多肥栽培条件の下で、飼料用米専用の多収性品種「モミロマン」の収量性を、県内の飼料用米生産で主に用いられている「アケボノ」と比較し、多肥栽培以外の増収方法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 「モミロマン」の粗玄米収量は、施肥窒素量4～12kg/10aの条件において、いずれの施肥量においても「アケボノ」比116～119%と多収である（図1）。
2. 「アケボノ」は、6月上旬～下旬の範囲で移植時期による収量差がほとんどないのに対し、「モミロマン」は同一作期の「アケボノ」比でみると、6月下旬移植で101%、6月中旬移植で111%、6月上旬移植で120%と顕著に増収する（表1）。
3. これは、「モミロマン」の一穂粒数が「アケボノ」と比べて約2倍と著しく多いために m^2 粒数を確保しやすく、移植時期を早めることで登熟歩合が高まることから、増収につながるためである（表1、図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 農業研究所（赤磐市）における、土壤可給態窒素量が100g当たり10.6mgの圃場において行った、栽植密度15.9株/ m^2 の稚苗移植試験での結果である。
2. 「モミロマン」を導入する際は、食用米への混種が起らないよう、充分注意する。

[具体的データ]

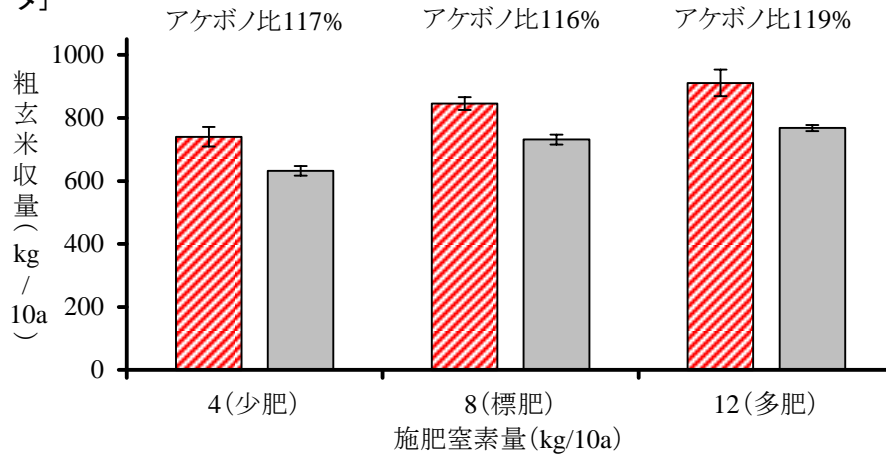


図1 アケボノと比較した、モミロマンの収量性

注) 2014年(6月上旬移植)と2015年(6月中旬移植)の平均値
 施肥窒素量の配分(基肥-穂肥)は、少肥:0-4、標肥:4-4、多肥:4-8

■モミロマン ■アケボノ 図中の縦棒線は標準誤差を示す

表1 移植時期が登熟、収量に及ぼす影響

品種	移植期 (月/日)	試験 年次	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	穂数 (/㎡)	一穂 粒数	㎡ ² 粒数 (×100)	登熟歩合 (%)	千粒重 ^Z (g)	粗玄米収量 ^Y (kg/10a)
モミロマン	6/6	2014	8/21	10/23	246	185	456	65	25.3	889 (120)
	6/16	2015	8/31	11/7	227	206	468	46	25.3	803 (111)
	6/26	2013	9/3	11/5	252	193	485	40	25.0	756 (101)
アケボノ	6/6	2014	8/29	10/17	369	83	307	97	26.7	741 -
	6/16	2015	9/6	11/3	299	95	283	92	26.1	722 -
	6/26	2013	9/7	10/26	348	100	347	74	25.1	747 -

注) 施肥窒素量8kg/10aで栽培

^Z 精玄米(粒厚1.8mm以上)について調査

^Y ()内の数字は同一作期のアケボノの値を100とした相対値



図2 穂の外観の違い

[その他]

研究課題名：大規模経営に対応した効率的稲作システムの確立

予算区分：県単

研究期間：2013～2015年度

研究担当者：渡邊丈洋